

平安京にも羅城があった

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

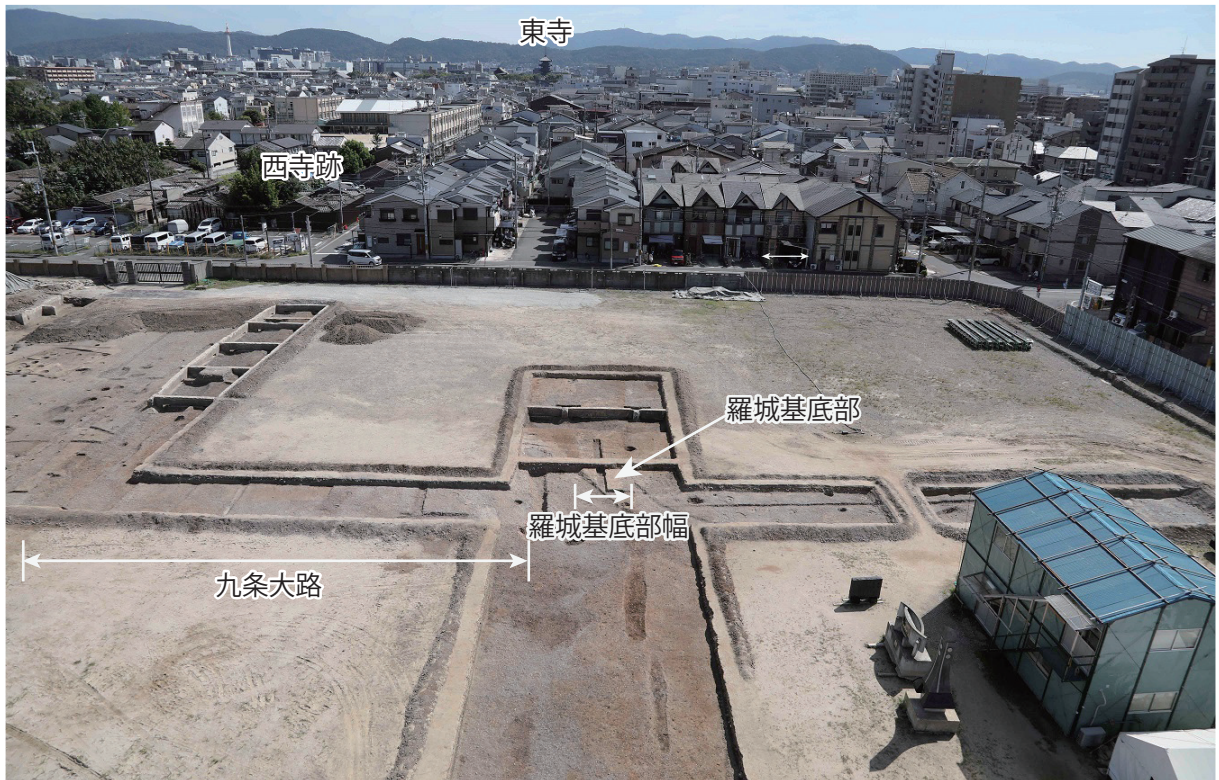


写真 1 平安京羅城・九条大路の発掘調査全景 (西から)

羅城とは 都城の周囲を囲む城壁のことをいいます。中国では外敵の侵入を防ぐため、明・清の時代に至るまで堅固な羅城が築かれていました。しかし、外敵のない日本の都城では、都城の四周を巡らす本格的な羅城は造られなかったと考えられています。それでは平安京ではどのような羅城が築かれていたのでしょうか。

史料に記された羅城 羅城と不可分の関係にある羅城門は、発掘調査では確認されたことはありません。しかし『日本紀略』弘仁 7 年 (816) 8 月に大風によって倒壊した記録があるので、平安京の造営当初

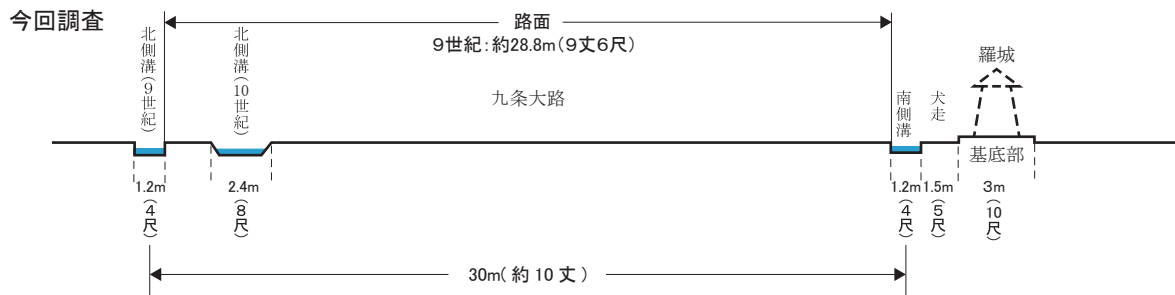
から羅城門の造営は進められていたと考えられます。その両脇にとりつく羅城もほぼ同時並行で築造されたのでしょう。

平安時代中期に編まれた法令集『延喜式』には、平安京の道の規模や構造などについて詳しく記されています。左右京職京程条には、「南極大路(九条大路)十二丈、羅城外二丈<垣基半三尺。犬行七尺。溝廣一丈>路廣十丈」とあり、羅城の記載があります。羅城は九条大路に接しており、その羅城の基底部分が幅 6 尺 (1.8m) で、羅城の外側には幅 7 尺 (2.1m) の犬走と、幅 1 丈 (3m) の溝が存在したこと

が分かります。

羅城の高さに関する記載はありませんが、『延喜式』木工寮の築垣条には、基底幅 6 尺の築地の高さは、1 丈 3 尺 (3.9m) と記されています。このことから、羅城も、京内に施工された大路の築地塀と同じ高さで、羅城を特段に高く造ったわけではなかったようです。

羅城の基底部を発見 2018・2019 年度に京都市南区の京都市立開建高等学校 (洛陽工業高等学校跡) の建設工事に先立って発掘調査が行われました。この場所は平安京右京九条二坊四町・九条大路跡に当たり、東側には西大宮大路を



『延喜式』の記載から復元

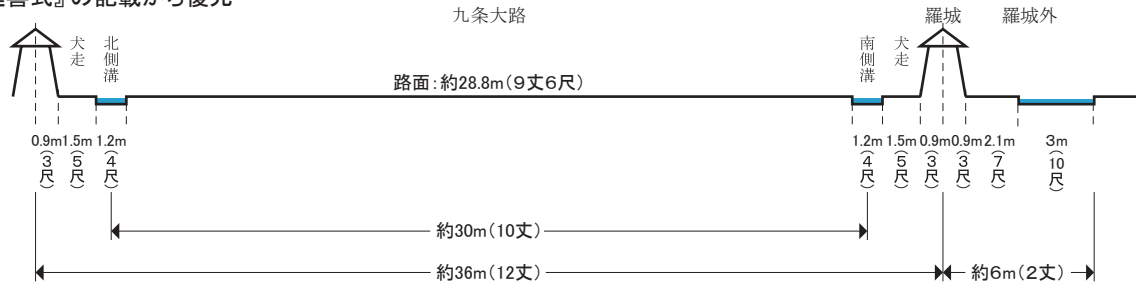


図1 九条大路断面模式図 (1 : 300)

※1尺≒30cm、1丈(10尺)≒3m

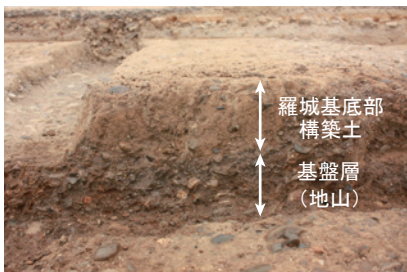


写真2 羅城基底部構築土断面(西から)

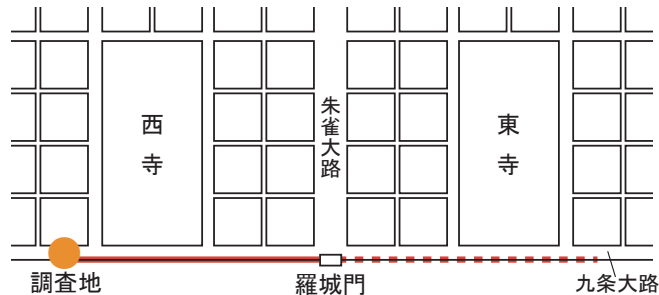


図2 平安京羅城の施工範囲推定図

挟んで西寺跡があります。調査では、平安京の南辺を画する九条大路の路面と南北両側溝が見つかり、さらにその南側で羅城の基底部が初めて見つかりました(写真1)。

羅城そのものは、失われて見つかっていませんが、羅城推定ライン上では羅城基底部と考えられる低い土壇状の高まりが見つかりました(写真2)。高さ6～18cmで残存高はわずかですが、南北幅は約3mあります。砂礫からなる基盤層を掘り込み、細かい砂と、砂礫混じりの土を盛り上げてから、突き固めて構築していることが分かりました。さらにその痕跡が東西方向に約45mにわたって続くことを確認しました。また柱穴列がない

ことから、羅城の構造は築地塀であったと考えられます。

羅城の施工範囲 羅城がどこまで施工されていたかについては、『延喜式』に南極大路以外の東・西・北極大路には羅城の記載がないことから、羅城門周辺のみ、または東寺・西寺までと想定されました。ところが、今回の発掘調査によって、羅城門から西へ約630m、西寺のさらに西側にまで羅城が造られていたことが分かりました(図2)。平安京は、左右対称で造られたので、左京側もこれと対称となる羅城があったと仮定すると、その総延長は少なくとも1.28km余りということになります。

平安京羅城の実態 『延喜式』には羅城の外側に幅1丈の溝が記

されていますが、今回の発掘調査では見つかっていません(図1)。本来は羅城とともに防御施設として設けられるべきものですが、羅城門から見える範囲だけ外溝を設けた可能性があります。このことは都の威容を示す施設として、防御機能より正面から眺める際の景観を重視した結果と考えられます。羅城門に入ってその壇上から望んだ景観は、左右対称にひときわ高くそびえる東寺・西寺の五重塔、前面には幅約84mもある朱雀大路が直線的に延び、壮大なものだったことでしょう。羅城を格段に大きく、四周を巡らさなくても、当時の人々に与えた、新京としての堂々たるインパクトは大きかったでしょう。
い うんじん
(李 銀眞)